

例えばこんなミノさん

ブロ x

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも、その時ミノさんに不思議な事が起こったら。

目次

例えばこんなミノさん

—三ノ輪銀は勇者と呼ばれる—

『ねう…あや〜』

『? おやおや?もう言葉をしゃべれるようになったのかい?マイリトルブラザー』

今はまだ赤ん坊の我が弟。

この弟が成長したら舎弟にしてこき使うアタシの夢は、順調に進んでいる。

弟をあやす為に昔の映画を見ているアタシ達。

食い入るように映像を見ている弟は、控えめに言つて可愛さが神がかつてる。

『You only see him when you are very young』

あなたに訪れる。

『ふしぎな出会い〜』

笑いながらアタシの指を握る、小さな弟の手のひら。

ふと思う時がある。

私は明日も、生きてここに帰つてこれるだろうか。

『あんたの姉ちゃん! 三ノ輪銀さんがしっかり!守つてやるよ〜!!』

『たよ〜』

この子の為なら。

勇気100パーセント!つてね。

「——だから。 化け物には分からないだろう」

斧を敵に向けて振り続ける自分。

生きて帰るといふアタシの言葉は意味を変えて。

もしかしたら明日死ぬかという、昨日の真実は今日の嘘になる。

「——この力」

ただ彷徨い、流されてゆく。 血潮が流れてゆく。

「——これこそが」

アタシ達矮小な人間の覚悟？ どうぞ嗤えばいい。

「そう、これこそが——」

驕りたかぶればいい。

「……ッ人間様の、」

限界を超えて、この道を往く。

ただただ往く。

「気合と、」

赤化する我が王道。

「根性と、」

断崖まで往くアタシの、

「——魂つてやつよッツ!!!」

◇

……なんだか不思議だ。

もう、あの二人には会えないか。 弟にも会えないか。

この身、この魂。

震えて、マグマのように噴き出して爆発しているというのに、思考はやけに綺麗だ。

——あちやく……。 ちよつと血を流しすぎちゃったかな。

小学生のアタシでも、血を流しすぎたら死ぬ事ぐらい知っている。

そしてアタシは勇者だ。

勇者とは、戦い戦い戦い勝つ、勇氣ある者。 恐怖を我が物とする人間の事。

現在の自分の状態は常に分かっているのさ。

——死ぬね、これ。

アタシの気合と根性と魂。

このままいけば、バーテックスどもの撃退だけは何とか出来るかもしれない。

伊達に何度も修羅場は潜っていないし、現在進行形で今鉄火場に身を置いている。

・・・自分を客観視すると、なんとまあズタボロなこと。

『私達はみな運命に選ばれた兵士』とは、誰が言った言葉だったか。

——でもアタシはこんな奴らの為に、大切な人の涙は見たくない。

皆に笑顔でいてほしい。

「……………だから見ててくれ」

三ノ輪銀。 一世一代の晴れ舞台。

「さあッ！ここがアタシの大見せ場！」

バーテックスを撃退し、友達を助ける我が王道。

「遠からん者は音に聞け！ 近くば寄って目にも見よ!!」

目指すは『皆』助かって、天下無敵のハッピーエンド。

「これが三ノ輪家長女！『皆』を守る、三ノ輪銀の実力だ——ツツ!!!」

・・・後は頼んだよ。

須美。

園子。

アタシの『親友』。



「銀…？」

「ミノさん…？」

幾度もバーテックスを退けた彼女らは、百人が百人見て、正しく勇者であった。

三人の勇者達は其の地で一堂に会する。

・・・視線の先は。

『——やった。 やったぞ、二人とも』

赤い背中。

誰かを、皆を守り抜いた意地と誇りの詰まった、小さな背中。

「ねえ。……銀。 そんな血を流して、病院に行かなきゃダメじゃない」

「…そうだよ、ミノさん。 お土産だつて弟君に渡さなくちゃ。

早く身体を治して、また一緒に遊ぼうよ。 ……私まだ、お料理教わって、ないよ」

『——アタシが追い散らかしたんだぜ。 あのバーテックス共を、三体もだ』

「……何で」

『——もうこの銀さんは正しく凄まじき戦士ツ！ 敬つたつて、いいんだぜ？』

「何で振り向いて、くれないのよお……ッ！」

——伝承によれば。

其の地にはたった独りだけで戦い続け、我らが天敵を退けた小さき勇者がいたという。

年齢、11歳。 当時小学生だったその者は、腕が千切れても身体中から紅蓮の血を噴出しても、

己が武器を振るいに振るい続けた。

彼女が手に持つ武器、二振りのその斧を自分の意思で手放す事はついに無く。

天敵を敗走せしめた後も、その逃亡先を睨み続けていたという。

……もう二度と来るなど。 もし来たならば、今度こそはこの手で滅してやるぞと。

その勇者を知る者達は、彼女は花のような女性だったと後世まで伝えた。

薄燈色の花卉のような美しい人。

いつも私達と一緒に笑って歩んでいた、強くて勇ましい人。

——真の勇者とは誰かと問われたなら。

彼女こそが、そう。

絶えて物言う事も無い、彼女こそが真の。

——勇者である。



『……真の勇者、か。 良いもんだねその称号』

——死んだ後つて色々なモノが見えてくるもんなんだなあ。
若い身空でその生涯を閉じた、アタシこと三ノ輪銀。

その後の世界は、須美と園子は、一体どうなったのだろうか？

この真暗の空間は、それをアタシに見せてくれた。

『まあ、両親も弟も助かったし無事に大往生を遂げた。

須美も園子も神樹様のお陰で、無事青春を謳歌出来た。そして大往生。 いやゝ万々歳だわゝ！』

これもこの銀さんの勇者パウワー！ シルバースピリッツのなせる業つてもんよ。

『……さて』

光が見えてくる。

心が、魂がその正体を理解する。

『はいはい、お迎えですね。 今向かいますよつと』

見渡しても見下ろしても、自分の身体はおろか物体すら見えない。

でもあの光に向かって進めという事だけは何故か分かる。

あれはゴールだ。 銀色に光る、アタシのゴールだ。

『園子や須美、後輩達の人生も見れたし、未練も無いし』

可愛いアタシの弟の、その後も見れたし。

『化けて出る趣味も無いし。 ……さあ、いきますか』

足を動かすイメージ。 それだけでアタシは光に近づく。

辛くも後悔も無い。 欲も無い。 寂しくも無い。

音も途絶えたこの中で、無い足を動かす。

勇氣一つをともしして。

「、——。——？」
無い筈の足を、動かす。

「』
動かす。」

「』、』
うごかない。」

「』——え、なに？」
足が。」

「………ねう」

記憶の彼方？ いや、忘れるわけが無かった。
何度も何度もあやしたんだから。 この手で抱っこだってしたんだから。

足を掴んでる、この小さな身体を。

「ねーちゃー！」

——、
——何、やってんだか。 赤ん坊は誰かが見てなきや、駄目でしようが。

『……こんな所まで、ついて来て、』

そんな目しちやって。

下の子は、上が見てなくちや、

「駄目でしようが——！」

笑う弟。 可愛いは正義。 子どもは七つまでは、神の子だ。

◇

その時の事を、鷺尾須美と乃木園子は生涯忘れなかったと伝えられている。

涙で滲む視界の中で、振り向く身体。

浮かべる、ぎこちないが天下無敵のその笑顔。

「…………え〜つと」

ひっこむ悲しみ。

「何て言ったらいいのか……」

握られる、二人分の拳。

「…あー、その時、不思議な事が起こった。これだツ!!!」

「心配させるなこの、親友——ツ!!!」

勇者とは、どこかで誰かがそう呼ぶから勇者というらしい。

瞳を閉じても。開いていても。

——四国はこの勇者三ノ輪銀と！鷲尾須美と乃木園子が守る!!

ささやく風の中。

茜空が、彼女達三人を照らしていた。